

## 『招提（チャートゥ・ディサ）』万人への愛情

〔鑑真の渡航と故郷—仏教文化の視点から〕※

三 友 量 順※※

### はじめに

奈良唐招提寺開山堂には聖武上皇をはじめ400余の人々に菩薩戒を授けた中国僧・鑑真和上（687—763）の乾漆像が安置されている。今年（2001年1月27日～3月25日）、東京都美術館には金堂の平成大修理にともないその乾漆像が展観された。第10次遣唐使船（733年）で唐に渡った留学僧・栄叡、普照たちの懇請をうけた鑑真和上は、幾たびもの渡航の失敗から盲目となりながらもついにその志を成就した（753）。結跏趺坐、右の掌を左手の上に置いた伝統的な座法、ゆったりと瞑想する和上の像はまったくの自然体でありながら、その指先や、端正な顔つきに不屈の精神が感じられる。

その像は和上の弟子・忍基が、講堂の梁が崩れる夢をみて、師の姿を伝えるべく像を作製したと伝えられている。閉じられた眼には、鑑真のこころを示すかの如く睫毛までもが繊細になぞられている。俳人芭蕉（1644—1694）は鑑真の像の臉に雫を感じた。「若葉して おんめの雫 拭はばや」〔『笈の小文』〕。雫は、閉じたままの鑑真の臉を拭わんとする芭蕉自身の涙でもあろうか。歌人、会津八一（1881—1956）は、昭和初期の時代の濁乱を見て和上が嘆かれるであろうことを気づかった。「とこしへに ねむりておはせ おほてらの いまのすがたに うちなかむよは」〔『南京新唱』〕。

仏教僧は、布教伝道のためには四方何処にも赴いた。釈尊ゴータマ・ブッダは、比丘（出家修行僧）たちに遊行伝道を勧めたからである。理法（ダルマ）を伝えることが「生きとし生けるもの」たちへのアルタ（artha 利益）・ヒタ（hita 福祉）・スカ（sukha 安楽）となると考えられていた。この「四方」をあらわすことばがチャートゥ・ディサ cātuddisa（Skt：チャートゥル・ディシャ cāturdīśa）である。漢訳には「招提」とも音写された。「四方」は生きとし生けるもののすむ場所であり、同時にそれは仏教では生きとし生けるもの（万人）への愛情をも意味する。「招提」はまたコスモポリタンの理想とも通じる。この理想は古代インドの諸宗教では仏教のみに表明されたという（中村元著『普遍思想』792頁参照）。

---

※Jiān Zhēn's voyages and a Report on the visit to his native place

※※Ryojun MITOMO 立正大学社会福祉学部社会福祉学科

キーワード：鑑真、招提（チャートゥ・ディサ）、仏教文化

鑑真が生まれた揚州江陽県（江蘇省）は揚子江（長江）下流域につづく水郷地帯にある。三国（義・呉・蜀）の領土をめぐる争いは、この肥沃な大地の覇権にあった。緑水あふる大地は生類にやさしい。そこに育まれる思想（宗教）が寛容であることも風土環境が人々の思惟傾向に大きく影響するからである。現代中国においても上海以南の沿岸部には、仏教信仰があつく息づいていることも、それを物語っている。江蘇省・浙江省などが中国で最も豊かな省であることを現代中国人たちは知っている。

本稿は、仏教文化の視点からとらえた鑑真の渡航、「招提」と理法（ダルマ）、並びに南京を含めた彼の故郷・揚州訪問のレポートである。その中で、仏教の説く理法（ダルマ）が実定法としての「法」とどのような関係にあるのかも考えてみたい。訪問リポートは前回同様、楽しく読んでもらえるものと思っている。

## I 遣唐使船と鑑真の渡航

和国の教主とも称される聖徳太子（576—622）が、当時の大陸の進んだ文化を受容すべく隋に使節団を派遣したのは7世紀初頭（607）のことである。前後4回におよぶ遣隋使の派遣は、隋の滅後、長安に都した唐朝（618年に李淵〔高祖〕により興る）には遣唐使として12回（任命は18回。そのうち後に派遣が中止されたもの3回。ほかは、百済に漂着したもの、唐朝の使節を送るためのもの、わが国の使節団を迎えるためのものがあつた）におよぶ文化使節団の派遣となった。かつての遣隋留学僧であつた慧光や慧日たちは帰国後（623）、中国の文化律令のすぐれたことを報告すると、舒明天皇は第1次遣唐使節団を派遣（630）することとなった。以降、奈良時代から9世紀の平安時代にいたる（630—894）、260年あまりの長期にわたって遣唐使は続いた。

当時、大陸への海路交通路はいくつかのルートがあつた。遣唐使船の航路は、初期・中期・後期におおむね3分される。初期（7世紀）は朝鮮半島の沿岸部からの北路で、1～2艘に総勢100～200人ほどが乗り込んでいた。九州から対馬をへて朝鮮半島と遼東半島の沿岸沿いに上陸、陸路で長安に至る。数十日を要した。日本と新羅との関係悪化から新しいルートが開拓されることになる。中期（8世紀）になると遣唐使最盛期で、4艘に総勢5～600人ほどが乗船し、南方諸島をめぐる南島路が大陸への航路であつた。種子島・屋久島・奄美諸島をへた航路で明州（浙江省寧波）に至る。後期（8～9世紀）は五島列島から東シナ海を横断する航路で、最短で10日ほどで目的地に着いたという。しかし、唐朝の衰退とともに使節団の規模や留学僧の滞在も縮小短縮されていった時期でもある。

鑑真の来朝は帰国（753）する第10次遣唐使船でのことであつた。その時、すでに彼は66歳となつていた。この帰国する4艘のうち第2艘船に鑑真は正式の出国許可のないまま渡航を企てた。東洋的な理解からは運命と宿命とは異なるという。運命は自らの努力によって切り開かれる〔『比較思想辞典』「運命論」の項（筆者担当）を参照〕。この第12次遣唐使帰国船の第1艘船

には安倍仲麻呂(698—770)が乗船していた。717年の遣唐使に加わった仲麻呂は、その時わずかに19歳であった。玄宗皇帝の時代、彼は科擧の進士に優秀な成績で合格し唐朝の戸籍もえた(中国名は朝衡または晁衡)。玄宗の信頼をえた仲麻呂はその後も肅宗・代宗と3代の皇帝におよそ40年間使え故国に帰ることなく唐土で生涯を閉じた。

50歳を過ぎた仲麻呂は望郷の念込みがたく皇帝の許可をえて帰国することになった。同じ、遣唐使船でありながら、中国側の護送使の身分として正式の許可を得た仲麻呂は第1艘船に。いわば密出国でもあった鑑真の乗った船は第2艘船であった。明暗が分かれた。藤原清河を大使とする遣唐使第1艘船だけが暴風雨のために、日本に到着することなく消息を絶った。やがて船は安南(ベトナム)に漂着し、土民の襲撃などからかろうじて生き延びた大使清河や仲麻呂を含む10数名のみが755年6月に長安にたどり着いたという。

「天の原 ふりさけ見れば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも」。遣唐使船の停泊する蘇州黄泗浦に、36年振りの帰国に際して到着した仲麻呂が望郷を詠んだ和歌は、鎮江市の北固山の山腹に歌碑となって1990年に建てられている。彼は唐代の著名な詩人・王維や李白とも親交があった〔王暁秋著(木田知生訳)『中日交流史話』3—5章、26—60頁参照〕。

安倍仲麻呂は鑑真和上とともに「中日友好の使者」として、現代中国では小学校3～4年次生の歴史教科書で人々はその名を知るといふ。勿論、友好の使者の中には先の大戦後、両国の国交回復に貢献した田中角栄前総理大臣も含まれる。彼の名は誰でも知っているという。隋唐以降の日中の文化交流史をみても、日本側から文化をかの地に伝えようとした者が皆無であったわけではない。たとえば『往生要集』を著した源信(942—1017)、それに日蓮(1222—82)の本弟子6人の1人・日持(1250—?)がいる。源信は自らの著作を唐土を往き来する商人に頼んで宋代にかの地にもたらそうとした(986)。日持は師・日蓮の「一天四海 皆帰妙法」の教えを実践すべく、日蓮の13回忌の法要をすまずと松前を経て単身海外布教に旅たった。それとは別に、梅尾の明慧(1173—1232)以外にも、はるか彼方の仏教の故郷天竺へと思いをいたす者たちもいた。

揚子江の江南では今日でも稲作が盛んである。中国の新石器時代の遺跡のうち、稲粒が出土した遺構は140箇所あまりを数えるという。その殆どが長江(揚子江)の中・下流域に集中している。浙江省の遺跡は7000年以上の歴史を遡る。江南の古代人たちは米を主食とし、高度の農耕技術をもっていた。今日、稲の品種からも、日本の稲作農耕が江南ルートから伝えられたとみなされている〔毛昭晰「稲作の東伝と江南ルート」；『浙江と日本』1—12頁参照〕。この舟山群島からの航路は遣唐使最盛期にも利用されたが、その航海が決して安全なものではなかったことは鑑真の幾度もの渡航の失敗がそれを物語っている。734年の使節団の帰国では、4艘のうち種子島に漂着したのは第1艘船のみであった。

遣唐使船には大使・副使ほか判官や使臣、録事・通訳・医師・画師などの随員、工匠や船員に、若干の優秀な留学生(僧)たちが加わった〔第1船には大使、第2・3船には副使または判官、第4船には判官が坐乗した〕。州府から到着の報をうけると唐朝は遣唐使たちを長安に

迎え入れ手厚くもてなした。かれらは長安を中心に1年ほど滞在し文化や工芸等の技術も学んだ。大宝律令の制定ほか唐制にもとづいてわが国の男女の衣服が定められるのもこの頃である。

わが国への仏教の公伝は、6世紀前半である。仏教は、その後、護国の宗教として展開する。平安2宗の祖、空海（774—835）も最澄（767—822）も遣唐使船で唐にわたり当時の新しい仏教文化を吸収しわが国に紹介した。一方、それに先立つ鑑真の来朝以前の白鳳時代には仏教の隆盛にはんして綱紀の面からも問題が生じはじめていた。朝廷は仏教界を統治する方向へと傾いていった。やがて大宝元年（701）年には「僧尼令」が定められた。鑑真が14歳で出家をした年でもある。「僧尼令27条」第18条には僧尼が「私に園宅財物を蓄へ」たりそれらを売ったり出息（利息）を取ることができないと定めている〔辻善之助『日本仏教史』第1巻、第2章第3節参照〕。当時すでにそうした問題が生じていた。出家となるための得度（度牒）の取り締まりは、わが国では中国（747）より早く養老4年（720）には公驗として制定されている。

南都6宗は天平19年（747）から天平勝宝3年（751）までに成立した奈良時代の6宗（学派）をいうが、そのうちの律は天武天皇の6年（678）に入唐僧・道光が戒律を学び伝えている。その後、聖武天皇の天平8年（736）に唐僧の道璿の来朝にともなって律が講じられた。そして孝謙天皇の天平5年（753）に入唐副使・大伴古麻呂の帰朝にともない太宰府に到着したのが鑑真である。彼の来朝によって初めて授戒をおこなう戒壇がきずかれ、天皇・皇后らに大乘の菩薩戒が授けられた。この鑑真をもってわが国の律宗の祖と仰いでいる。

わが国では古くから、正式な具足戒を受ける時には3師7証（最澄『山家学生式』）に出る。3人の師〔戒和尚・羯磨師・戒儀師〕と7人の立ち会い人となる高僧）を必要とするとされている。当時、わが国では正式の授戒がなされぬままに僧尼が年毎に増え、かれらは租税や課税を免れた。それは律令国家の基礎を揺るがすことにもなりかねない。こうした問題は為政者を悩ませていた。そうしたなかで元興寺の僧隆尊は伝戒の師を招聘することを舎人親王をとおして上奏した。隆尊の信任あつゝ興福寺の栄叡と普照はこうして733年の第10次遣唐使節団に加わった。同年8月、船は蘇州に到着した〔4月3日に難波津から出航しているので約4ヶ月を要している〕。遣唐使の到着は唐朝に届いた。唐の都は長安であったが、実質的には前年の天候不順による食料不安のために玄宗の行幸した洛陽が中心的な役割を果たしていた。遣唐使一行は洛陽に向かい、翌734年の4月に到着した〔735年には遣唐使の大使・多治比広成たちは先に洛陽の福先寺の律僧・道璿を伴って日本に帰っている。この帰路の航海でも大使の乗る第1船が暴風のために越州に漂着後、辛うじて戻っている〕。736年、玄宗は久しく在った洛陽から長安に戻った。この時、随行した栄叡と普照は勅命によって毎年絹25匹を賜っている。やがて長安大安国寺の道抗の取り次ぎで、宰相・李林甫の計らいをえた栄叡と普照は揚州の大明寺に至った。すでに入唐から9年の歳月がたっていた。かれらは鑑真に接足の礼をして本意を告げた。「仏法は東に流れて日本国に至りました。しかし、仏の教法はあっても法を伝える人がございません。わが本国ではむかし聖徳太子が、200年の後に聖教が日本に興る、と申されておりま

す。今ようやくその時運がめぐって参りました。どうぞ、和上さまには東遊して教化を興してくださいますよう。(仏法東流至日本国 雖有其法而無伝法人 日本国昔有聖徳太子 曰二百年後聖教興於日本 今鍾是運 願大和上東遊興化)『東征伝』仏教全書史伝部11, 24頁中]。鑑真はみずから伝戒の師として日本に赴くことを承諾した。この時、21名の高弟たちも師とともに随行することを申し出たという。

宰相の助言にしたがい、天台山国清寺において僧侶たちに供養をするという名目で鑑真ほか栄叡と普照たちは渡航のための食料を整え準備をした。そうしたなかで随行の一員ともくされていた朝鮮僧・如海の密訴によって第1回目の鑑真の渡航計画(743年4月)は失敗に終わった。当時、海賊による被害が多発しており一行のなかに海賊と通牒している者がいるという密訴であった。捕らえられた栄叡たちはやがて放免されたが、この事件を切っ掛けに随行を申し出た幾人かは去ってしまった。

官送を受けることなく渡航することは難しい。鑑真は再度の東征の懇請を受けた。80貫の銭を用意すると軍舟を買い入れ船員を雇い、743年12月、揚子江を下った。この第2回目の渡航計画も、暴風雨の難を耐えて大海原に出たがついに座礁して救助されることになる。明州の太守は一行を鄞県の阿育王寺に留めた。やがて越州の僧たちの密告から、日本への密航が明るみに出ると首謀者とみなされた栄叡は捕らわれの身となった。しかし、枷をつけられて都へ連れられる途中の杭州において栄叡は病を得て治療を願った。一策をめぐらし病死ということで、おそらく護送使の計らいもあったのであろう、栄叡は阿育王寺の鑑真のもとへ戻る事ができた。第3回目の渡航計画もこうして挫折してしまった。

第4回目の渡航は福州からの渡航が計画(744—5)された。先に僧法進ほか2名を遣わして船や食料などの準備をさせた。天台山への巡礼という名目で鑑真一行30余人は天台山・国清寺をへて、先発のまつ福州に向かった。しかし、この渡航計画も、揚州龍興寺にいた鑑真の高弟・靈祐が師を思う気持ちから渡航阻止が官に願い出されたために挫折することになる。鑑真たちは本寺のある揚州へと送還された。

748年、鑑真はすでに61歳となっていた。同安群にいた栄叡と普照は揚州に至り、崇福寺にいた鑑真とともに第5回目の渡航に挑むことになった。同年6月、新河(運河)を利用してかれらは出航した。大海に出たかれらの船は強風に遭遇し、停泊や漂流をつづけ、やがて11月には遙かかなた海南島の南端に漂着することになった。振州の別駕・馮崇債に迎えられた鑑真一行は、ここで1年間の滞在を余儀なくされた。やがてかれの住した大雲寺の再興もおえ、馮崇債は護衛兵とともに鑑真を送り、栄叡・普照たちは船で海路から崖州に行きそこで鑑真たちと落ち合った。崖州でも鑑真は罹災した寺院の再建をはたしている。3日をかけて本土となる対岸の雷州にわたった鑑真一行は、羅州から更に西江岸の藤州をへて梧州から船で桂州へと向かった。およそ1年間の滞をおえて再び桂州から桂江を下って広州への途中、端州・龍興寺において栄叡は病のために生涯を閉じた(749)。

栄叡を弔った後、鑑真一行は広州へ至った。広州には当時バラモンの寺が3ヶ所あり、梵僧

（インド僧）がそこに居住していたという。広州大雲寺に留まった後、かれらは揚州に向かった。北江をのぼり韶州開元寺に移った頃から、鑑真の視力は弱まりついに胡人による治療の甲斐なく失明してしまう。『続日本紀』には栄叡の死を悼むあまり悲泣して失明したとも伝えている。鑑真の63歳（750）のことであった。普照は揚州に戻ることなく、そこから明州の阿育王寺に移り、帰朝の機運の訪れることをまつことになった。

752年の春、藤原清河を大使とする10回目の遣唐使船4艘が、明州に到着した。その際、普照は大使に面会し、鑑真和尚の渡日を皇帝・玄宗にとりなすことを請じたのではと『鑑真大和尚伝の研究』の著者・安藤更生氏は述べている〔『同』267—268頁註20〕。鑑真ほか持律の弟子5人の招聘には唐朝から条件が出された。それは玄宗が篤く奉じていた道教の僧（道士）の帯同であった。その申し出を断るために、大使は春桃源等の4名を留めて道教を学ばせることにして鑑真の名を引き下げてしまった。

このために公の招聘許可のないままの密出国のほかに鑑真を渡日させる手段がなかった。大使・藤原清河一行は、753年10月、揚州延光寺にいた鑑真を訪れ、鑑真に方便（手段）をめぐらして渡日するよう懇請している。鑑真はその懇請に応えた。師に随う者は総勢24人であった。鑑真たちは揚州を出て、遣唐使船のまつ蘇州・黄泗浦に向かった。ところがここで、大使清河は使節団長として、外交上の問題が生ずるのを恐れ、かれらを下船させてしまった。11月10日の夜、副使・大伴古麻呂は独断でかれらを自らの船に乗せ、13日には報告を得て駆けつけた普照を副使吉備の船に乗せた。こうして鑑真は栄叡・普照らの懇請を受け、渡航を企てること5回、12年の歳月の後、第6回目に伝戒の本懐を遂げた。大使・藤原清河がはたして第2艘船に乗った鑑真のことを知らなかったかどうかは疑問が残る。いずれにせよ、副使としての大伴古麻呂の船に乗ったことで外交上の問題が回避され、伝律の高僧の招聘が成就された。

## Ⅱ 「招提」と理法（ダルマ）

鑑真伝のまとまった研究としては安藤更生・元早大教授の学位請求論文『鑑真大和尚伝の研究』（平凡社、初版第1刷1960年、第3刷1994年）がある。長期にわたって中国滞在の経歴をもつ氏の研究は関連文献を網羅しつつした感のあるすぐれたものである。本稿前項でも鑑真の渡航の経緯については概ねその研究にもとづいている。作家・井上靖の小説『天平の甕』（岩波書店）によって広く鑑真の渡日が知られるようになった。近年には共同研究を含め日中文化史に関する書籍が出版されている。当然ながらその中には必ず鑑真が扱われている。わが国の仏教文化は遣隋・遣唐の文化交流抜きには語れない。仏教文化（仏教福祉）をテーマとしてあつかうときに、鑑真の渡日は重要なエポック・メイキングとなる。

渡日の後、鑑真は754年3月には勅命にり授戒伝律を任されることになった。その年の4月、東大寺で、聖武上皇・孝謙天皇、光明皇太后ほか400余人に菩薩戒を授けている。同5月には東大寺に戒壇（授戒のため壇）が建てられた。もともと仏教徒になるためには仏・法・僧の3宝

に帰依を誓うだけでよい。伝統的な仏教では正式の出家（比丘）となるためには完備した戒律（具足戒）を受けなければならない。その年は満20歳と定められていた。一方、出家・在家を一貫した大乘仏教では菩薩戒を受けた。初め鑑真は18歳で菩薩戒をうけている。具足戒は諸伝には景龍2年（708）とされている。鑑真の21歳の時とされるが、それは数え年でのことである。

757年、孝謙天皇は備前の国の水田100町を下賜し、鑑真はそれをもって各地から集まってくる十方の僧たちの修行学問のために伽藍の建立を発願した。やがて平城京内の1親王の旧宅地が下賜された。普照たちは鑑真と協議し、「持戒の力を以て国家を守護」するためにも伽藍を建立することを決めた。唐招提寺創建は「聖武天皇」の御霊供養の目的もあった〔『元亨釈書』巻22『本朝高僧伝』巻57〕。鑑真は758年に淳仁天皇より「大和尚（上）」の称号を賜った。この時に、鑑真は大僧都職（756年に任命）から免職されている。それは「政事を躁煩にして敢えて老を勞せず」という天皇の鑑真にたいする思いやりからであった。

来朝から10年、763年5月6日、鑑真は76歳の生涯を静かに閉じた。彼には入寂に際する覚悟があった。「我れ若し終に亡ぜんとときには、願はくば、坐して死なん」。頭陀（ドゥータ dhuta）は出家僧の修行の規範である。12頭陀のなかには「常坐不臥」が含まれる。ほぼ史実を伝えると見なされている鑑真の伝記『唐大和上東征伝』が淡海三船によって著されたのは779年のことである。

鑑真に始まるわが国における戒律の復興は諸方面に大きな影響を与えた。平安時代の最澄も彼の教書から影響を受け、鎌倉時代の忍性は『東征伝絵巻』5巻（1298）をまとめている。17世紀の江戸時代になると将軍綱吉は金堂や仏像の修理をおこない、母・桂昌院も唐招提寺に700両の黄金を寄進している。金堂は明治（1899）にも大修理が行われた。その後、和上の坐像が中国揚州に里帰りしたのは1980年のことである。1998年には唐招提寺の伽藍が世界文化遺産に登録されている。

鑑真の来朝によってもたらされたものは伝戒のみではない。日本文化の発展に寄与したもののなかには薬学・医学・建築・芸術（仏像仏画）などが含まれている。鑑真の第2回目の渡航に際して、日本に将来しようとしたものが『東征伝』に記されている。食料品・仏像・経・蔬・仏具などの他に、薬品・香料として「麝香、沈香、甲香、甘松香、龍腦香、安息香、棧香、零陵香、青木香、薰陸香、畢香、呵梨勒、胡椒、阿魏、石蜜、蔗糖、蜂蜜、甘蔗」などがあった〔安藤更生『前掲書』124—125頁参照〕。

鑑真の渡日に唐朝側の意図があったのではという見方もある。当時の半島を含む情勢に唐朝がわが国への監視の目的で彼を送ったのではという推測である〔鈴木治『白村江一敗戦始末記と薬師寺の謎』学生社、1972年〕。それによればわが国からの招請も鑑真の渡航にかかる強い意思も（彼が盲目となったことさえ）すべてにながしかの意図があったということになってしまふ。その推測にたいしては王勇氏の論文「鑑真渡日の動機について—鑑真スパイ説と思託作為説への批判を兼ねて—」〔『浙江と日本』関西大学出版部、1997年。13—41頁〕に詳しくとり

あげられ批判が加えられている。

また現代中国では1978年以来、鑑真は奈良旧仏教界から白眼視され攻撃をうけたとする見解が一部の学者によって発表された。これにたいして、王金林氏は論文「鑑真と「奈良旧教団」——王向榮氏への質問状」[『中国人の見た中国・日本関係史（唐代から現代まで）』21—40頁]で、日本側資料の精査にもとづいて「在日10年間を通じ、鑑真は朝廷から冷遇されたことはなく、また相対立する教団も形成されておらず、奈良旧教団による排撃や排斥もなかった」と結論づけている。鑑真の普遍思想的な側面を考慮する時に先ずあげられるのが、理法（ダルマ）のために身命を惜しまなかったということである。仏教の「理法（ダルマ）」が人のためをはかるものであることはこれまでに筆者は述べてきた。中村 元博士は、「人間を最高目的に達成せしめるもの」「その原理は、人間のためをはかり、人間を高貴ならしめるものでなければならない」と言う[『原始仏教』NHKブックス、昭和56年第34刷17頁]。仏教文化には、釈尊・ゴータマ・ブッダ以来の根本精神、それは生きとし生けるものたちへの「アルタ（利益）・ヒタ（福祉）・スカ（安楽）」を願うという誓願（プラニダーナ *pranidhana*）として一貫している。仏教美術（芸術）が人のこころを宗教的に感動せしめるのは、その精神の具現をそれらが目指しているからである。仏教の「招提」もまさに、そこに根ざしている。鑑真が幾度もの失敗にめげずに遂に伝戒の志をはたしたその不屈の精神は讃えられるべきものである。同時に、鑑真をうながし、その渡航を成就させた者たちがいたことも忘れてはならない。かれらもまた「不惜身命」の精神をもっていたからである。

理法（ダルマ）は人間がいかなるときにも、何処にあっても遵守すべき永遠の理法でもある。それは必ずしも今日の社会における法律とは合致しない。しかしその社会で暮らす我々は、その社会で定められた実定法を守らなければならない。実定法はその時代、その国（社会）において適法性や妥当性がある。それ故に実定法を絶対視することは危険である。やや遅れて登場する仏教の經典には「国の俗法に随い、是とするなかれ、非とするなかれと」[『中阿含經』第43卷『拘楼瘦無諍經』第8、大正1巻703a]という。実定法を超えた普遍的な理法（ダルマ）を仏教徒たちは重んじた。もしそうした理解がなければ、玄奘にせよ、鑑真にせよ、かれらは正式の許可のないいわば密出国者である。

玄奘は帰朝に際しては高昌国から上表をもたせて長安に遣わせており、敦煌でも再び皇帝に上表を差し出して帰還の許可を得ている[拙著『玄奘』清水書院、1994年、169—174頁参照]。かれらはいずれも理法（ダルマ）のためにやむなく当時の社会の実定法を犯した。或いは正式の許可を待つことができなかったのかという意見もあるかもしれない。もしそうしたことが可能であったなら、恐らく玄奘も鑑真もそうしたことであろう。人の一生は限りがある。理法のために生きることが出来るのも、その限りある一生の間である。理法（ダルマ）に生きるとはひとを生かすことでもある。勿論、理想は現実との狭間で修正を余儀なくされることがある。原始仏教の時代には明確でなかった宗教的反省（懺悔）が大乘仏教には色濃くあらわれている。人間は生類を傷つけ、はなはだしくは命を奪って生きている。多くの命を救うためには



1つの命を奪うという「一殺多生」の思想もやがて大乘には登場する。仏教思想を実践論として考える捉える時に、「不殺生（アヒンサー）」を実現する上でそうした思想がどのように受け入れられるのかは、倫理的・論理的にも仏教者が真剣に考えなければならない。理法（ダルマ）を重んずることと実定法をどのように捉えるかという点では、今日の世界情勢が重要な示唆を与えているといえよう。

### Ⅲ 鑑真の故郷・揚州への訪問

報告者は、今年（2001）6月、中国アジア文化研究会（会長・丸山勝己）のメンバーたちと揚州を訪れた。江蘇省には揚子江（長江）に沿った水郷地帯を東に下るように順に南京、揚州、鎮江、無錫、そして上海が位置する。それらが今回の我々の訪問の道程である。6月22日（金）、成田発13時50分のNU-524便が上海に着いたのは現地時間の16時45分であった。上海から南京へは中型バスで約4時間、道なりで約270キロの旅である。上海からの現地旅行社のガイド施氏は45歳、彼は日本にも来たことがあるという。その施氏が東京で強く感じた日本の印象を語ってくれた。彼が驚いたその3つの印象は次のようなものである。1)10分の娯楽のために2時間も並んでいる（近年、浦安に出来た大型遊園地でのことであろう。中国人なら10分で列を乱してしまうと彼は言う）。2)歩行者が信号を守っている。3)地下鉄が時間どおりにピタッと来る。日本人ならどれも殊更取り上げることもないようであるが、施氏にとっては驚きであったのだろう。

小雨の中を当日の宿舎となっている南京のホテル（南京恰花假日飯店）に到着した。途中、街並みにそって古い家並みや建設中の建物が見られる。参加したメンバーの一人君嶋廣幸氏は建築関係に詳しい。彼が「造っているのか壊しているのか判らない」と微笑みながらつぶやくのを聞いて、なるほどと頷いた。翌日の南京の現地ガイドは周氏（42歳）である。関西弁でダジャレ好きの氏の案内で中山陵の観光に向かった。南京は夏期には最高気温が44度にも達する。市内中心部の街路樹にはプラタナスの並木が続いている。街路樹の下では気温が5度も低くなるという。蒋介石夫人の宋美齡（1901—）氏は100歳を超えて現在もアメリカで健在であるが、彼女がその並木を植えさせたということをガイド氏が話してくれた。南京城の城壁（20m）の漆喰にはもち米や石灰などが用いられたという。農耕地帯の豊かな土壌があってこそそうした城壁が出来たのである。俗に南京の「食い倒れ」と周氏が面白可笑しく話してくれた。関西にも長らく滞在したことのある彼が大阪にちなんでそう感じたのであろう。確かに到着早々、皆少々過食の感がある。今日の南京料理は総じて薄味の感がする。彼によると上海は「着倒れ」だそうである。「じゃ東京は？」メンバーの1人が尋ねた。すると彼は「東京は買い倒れ」と答えた。現代中国人の眼からはそう写るのであろう。

南京には中山陵や明孝陵（明太祖）がある。中山陵は辛亥革命（1912）により国民党を結成した孫文（1866—1926）の陵墓である。参道正面の「博愛」の扁額の文字は孫文の筆になる。

キリスト教では博愛（philanthropy）を説く。アメリカでの生活体験もある孫文がキリスト教を信奉していたということを知る現代中国人は少ない。博愛と同じ意味で、中国には古く墨子（前5世紀）が「兼愛」という言葉を用いている。

中山陵の392段の階段は当時の中国の総人口3億9千2百万から採ったという。同行のガイド氏たちにかれらの宗教観を尋ねた。施氏は儒教や仏教を信じているという。周氏は特にこれといった信仰はないと答えた。最近では、3教（儒教・仏教〔チベット仏教も含む〕・道教）のうち一般の中国人のなかには道教の信徒も増えつつあるという。同時に都会の若い世代にはキリスト教の教会に行く人々が増えているという。かれらの殆どがキリスト教がどういうものかよく知ってはならず、ファッションの1つとして行っているようだと語ってくれた。

ちなみに南京大学と立正大学とは本年、本学国際交流委員・矢野光治教授（文学部）の多年にわたる交流が活かされ協定校となったことを記しておきたい。

中国には古来から83王朝521名の皇帝がいたと周氏が説明した。明孝陵は明の太祖（1368—1398）の陵墓である。「治隆唐宋」としたためられた石碑にもあるように明代においても、「唐代・宋代」は中国における理想政治が行われていた時代と考えられていた。南京は地理的・風土的環境が人々の生活に適していた。水郷地帯の豊かな土壌、そして市城区にある玄武湖、取り巻く水路、それらはいやが上にも人々をいざなう。すでに西紀前5世紀に、越王勾践が都城を築いて以来、都はしばしば戦火にみまわれた。近代には1937年12月の日本軍による南京陥落ではその後の40日あまりの間に、一般市民も含めて30万人が殺害されたと言われている。いわゆる「南京大虐殺」が実際にあったのかどうかということについては、日本側の一部から疑問視されている。インターネット上でもその見解が取り上げられている。当時南京にいたわが国の文化人たちがその事件を全く知らなかったということも、その根拠の1つとしてあげられている。

「南京大虐殺」は中国人たちにとっては決して忘れられない出来事であるとガイド氏たちは語った。徐志耕著『南京大虐殺』（1994年第1版、2001年第1版2次印刷、北京・外文出版社）は邦訳がある。当時の被害者たちの聞き取り調査を、単なるでっち上げと一蹴することは出来ない。南京事件にたいする今日の中国の政治的あるいは教育的意図はともかく、忌憚なく私見を述べれば、「同胞として恥ずかしいことであるが、当時の日本の軍隊の中には、おそらくそうした蛮行を行う者たちがいたであろう」、としか言いようがない。日本人ならやりかねないという意味ではなく、どの国の軍隊でもやりかねないという意味も含めてである。靖国神社問題では、戦争犯罪の責任を負うべき者たちが同等に祭祠されているということに中国側が怒っている。老子には「怨に報ゆるに徳をもってす（報怨以德）」ということばがあり、仏教にも同様な釈尊・ゴータマ・ブッダのことばがある。南京市内に新しく建てられた追悼メモリアル・ホールには「日本の侵略者たちによる南京大虐殺の犠牲者のためのメモリアル・ホール The Memorial Hall of the victims in Nanjing Massacre by Japanese invaders」と銘打たれている。ホール内では30分ほどのビデオを鑑賞する。現地を訪れた日本の高校生たちからの千羽鶴

がおくられていた。ホール敷地屋内のゆるやかな斜面には、累々と横たわる犠牲者たちの白骨の一部がそのままに保存されている。犠牲者たちにたいする深い哀悼の気持ちが自然に沸き出て来た。

日本が中国をはじめ戦禍をうけたアジア諸国から侵略者 (invaders) として非難されている。当時の日本やアジアを取り巻く世界の情勢が、わが国を戦争へと突入させたとしても、わたくし達は、その非難を素直に受けなければならない。戦後半世紀を過ぎた今、次の世代にも戦争の悲惨さを語り継がなければいけない。同様に、幾年かの後には、中国もチベット等にたいする自治区化の問題にも絡んで、同じように「侵略者」と自らを自己批判しなければならない時代がやってくるかもしれない。

揚子江 (長江) の南側に位置する南京から、東北東方向へ向かった揚子江の北側が現在の揚州である。南京大橋からは90キロほどで揚州に入る。車では約2時間の距離である。緑と水の豊かな農村風景は、同じ中国でも昨年中央アジアを訪問した印象とは別世界の感がある〔報告者レポート「敦煌・ウルムチ・カシュガルへ (仏教文化の視点から)」: 『人間の福祉』No.9, 191-205頁, 2001年参照〕。舗装された幹線道路沿いの農村部の家屋に立派な建物が多いのが印象的である。それだけ農家が豊かになっていることを示しているのだろうか。現在の中国経済も人々が流入した都市部では多くの失業者が生まれていることも事実である。周氏によれば、南京ではすでに30万人ほどの失業者がいるという。また農村部では嫁不足が深刻で、人身売買事件があったという。200人ほどの女性 (20代の女性は日本円で7~10万円ほどで売られたという) が売買され、首謀者3人は捕らえられて死罪となったと話してくれた。今日では結婚適齢期が男性28歳、女性26歳であるという。自家用車の増加によって交通事故も増えた。年間で11万人もの死亡事故が全土ではあるという。一般市民の生活を知るには、物価を記しておくことも参考になるかもしれない。たとえば車はおよそ10万円 (日本円で150-160万円) する。自家用車が増えたということは、筆者の推測するところでは、車の価格とほぼ同じ年収を購入層たちが得ているということになる。そこで、南京のみやげ物を扱う大型店舗に勤めている日本語を解する50歳代の男性にたずねてみた。月収 (一般には約1000元) に役職や能力・売り上げやボーナス等がプラスされて10~15倍の収入となるという。しかし彼の場合は月収が5000元ということであるから、×15倍なら自家用車を購入することも不可能ではない。ちなみに、現在のガソリン価格は1ℓあたり2.5~3元であるという。

1980年に初めて北京を訪問した筆者には、その当時と比べると現在の北京や上海などは隔世の感がある。おそらく筆者と同じ感を懐く方々も多いだろう。そのことを施氏に話すと、「10年は昔、20年前は大昔」ということばが返ってきた。1980年に北京訪問の際にみた文革後の寺院の荒廃、ほとんど人民色一色の衣服などは、かれらにとってもう「大昔」のことなのであろう。

現在の揚州は賑やかな街である。その街の一角にある我々が滞在したホテル「揚州賓館」は瘦西湖に近く水路に隣接して建つ。ホテルには土曜の夜になるとダンスに興じる若い人々が集

まってくる。翌日（24日）は日曜日のためあつてか湖には舟遊びをする家族連れの人々で賑わっている。鑑真が住したという大明寺もやはりこの瘦西湖の近くに位置する。大明寺の小高い場所に隣接して烈士を記念する場所がある。歴史を伝える静かな佇まいを感じさせる大明寺の境内と、広大な参道をもつ新しい烈士の記念公園とは対照的であった。現在の揚州から往時の鑑真を偲ぶことができるのであれば、やはり、その風土であろう。周知のように歴史ある寺院なども1980年以降にほとんどが修復されている。唐招提寺・開山堂の鑑真和上像の複製を安置する、現在の大明寺の境内から鑑真を偲ぶ以上に、揚子江の水郷地帯の風土は、今回の訪問では印象的であった。仏教の「諸行無常」の法印（真理の旗印）にある如く1刹那づつ形あるものは移り変わり滅びていく。後に一行が訪問した無錫の寄暢園には乾隆皇帝が来遊した時の碑（1751）がある。そこには「十六春秋一刹那」の1句が見られる。「十六年はまさに1刹那であった」という清朝の皇帝の感慨は、時を隔てて、我々のこころを打つ。風土もまた「無常」である。幸いにして、鑑真を育んだ江蘇省・揚州の自然風土は、現在にそのすがたを伝えてるように思われた。ひとの気質や思惟傾向が風土と密接な繋がりがあるとすれば、まさに江蘇省の自然豊かな風土は、南北に長い形状をもつ日本とは季節感での差異はあっても日本によく似ている。鑑真和上への思慕が、わが国において文学においても宗教芸術においても優れた花を開かせたのも、そこに理由があるかもしれない。余談ではあるが、揚州料理は南京に比して多少濃い味付けであった。湯葉が名物であるというのも嬉しい。

訪問団一行は、揚州の訪問をおえて鎮江に向かった。鎮江市は河南になる。長江が南に膨らむ鎮江湾の河岸には西には金山公園、東には北固山公園がある。市内には六朝時代の古城遺址もある。鎮江は「天下第一江山」として名高い。南京から上海に至る揚子江沿いの景観にはおよそ山と呼べるものは少ない。唐代の詩人たちにうたわれた金山の名称は『華嚴經』にある「香水海」の「七金山」に由来しているという。かつて明代にはわが国の雪舟がこの地を遊覧してその風景を描いている〔『綺麗な金山』南京大学出版社、1990年、6頁参照〕。中国の『白蛇伝』の故事を伝える「白龍洞」もこの金山にある。金山江天禪寺の壁の「東晉古刹」の書は趙僕初氏の筆である。

境内の堂宇の屋根に『般若心経』の1句「度一切苦厄」の文字があった。現代の中国人たちの仏典にたいする理解を知る上で興味深いので記すと、ガイドの施氏が般若心経を説明するにあたり「ここで唱える経」と解釈した。正しくは「般若（智慧）の完成（波羅密）prajñāpāramitā」を説く「重要な（hṛdaya心臓の意）経」の意味であることを彼に告げておいた。北固山もやはり小高い岡というべきところであろうか。曹操と玄德とが岩を割って誓ったという故事を伝える庭園もある。山頂にいたる場所には11世紀に建てられた鉄製の仏塔がある。趙僕初氏の筆になる「望月望郷」の心境をうたった安部仲麻呂の歌碑が建てられたのは1990年のことである。

無錫市へは鎮江から車で1時間強ほどで着く。巨大な淡水湖・太湖の北岸の街である。平均水深2.5mの太湖では淡水真珠の養殖をおこなっている。物産店では観光客のために30cmはあ

ろうかと思われる大きなカラス貝のような淡水真珠貝を割ってみせている。すると中から大小様々な淡水真珠が「数十」もゴロゴロと出てきて驚かされた。遊覧船に乗ると彼方の湖面の島（仙山）には大きな老子像や仏頭ほかの彫像が遠景に望める。近郊の人々が信仰を寄せているという。「江南第一山」と称されている南朝古刹の恵山には名園・寄暢園がある。『錫恵勝景』〔陝西省旅游出版社、1996年〕には六朝以来の詩人たちの漢詩100選を紹介している。中国では纏足を「金蓮」に譬える。筆者は実際の金蓮が咲いているのを園内の金蓮池で初めて見た。直径5 cmほどの金色の蓮華（睡蓮）である。1980年から毎年北京を訪れる機会があったが、当時、天安門広場を家族に支えられて観光する、纏足の年老いた女性に会ったことがある。南京での日本兵による暴挙の際にも、纏足をした女性たちが逃げられなかったという。どの国にも弱者が虐げられてきた痛ましい歴史がある。

すでに規定されている紙面を超えてしまったので、本リポートはここで閉じるが、仏教文化は社会福祉と密接な関連を有してきたことをこのリポートを通じても紹介したつもりである。『人間の福祉』第7号（2000年2月）・第9号（2001年2月）には筆者が仏教文化の視点から報告した中国訪問リポート「天台山・普陀山への訪問」「敦煌・ウルムチ・カシュガルへ」があるので参照していただきたい。

#### 〔参考文献〕

- ・中村元著『普遍思想』中村元選集決定版・別巻『世界思想史』2，春秋社，1998年。
- ・中村元著『原始仏教』NHKブックス，昭和56年第34刷。
- ・安藤更生著『鑑真大和上伝の研究』平凡社，初版第1刷1960年。第3刷第1994年。
- ・『中国人の見た中国・日本関係史（唐代から現代まで）』東方出版，1992年初版第1刷，1995年第2刷。
- ・『大日本仏教全書』第72巻史伝部11「唐大和上東征伝」。
- ・『比較思想辞典』東京書籍，2000年。
- ・『国史体系』第2巻『続日本紀』，吉川弘文館，1966年。
- ・毛昭晰著「稻作の東伝と江南ルート」；『浙江と日本』関西大学東西学術研究所・国際共同研究シリーズ1，関西大学出版部，1997年。
- ・王曉秋著（木田知生訳）『中日交流史話』日本エディタースクール出版部，2000年。
- ・鈴木治『白村江一敗戦始末記と薬師寺の謎一』学生社，1972年。
- ・『浙江と日本』関西大学出版部，1997年。
- ・徐志耕著『南京大虐殺』北京・外文出版社，1994年第1版，2001年第1版2次印刷。
- ・『綺麗の金山』南京大学出版社，1990年。
- ・『錫恵勝景』陝西省旅游出版社，1996年。
- ・『大正新修大藏経』第1巻「中阿含経」第43巻『拘楼瘦無淨経』。
- ・吉田迪雄『辞世の句と日本人のこころ』東洋館出版社，2000年。
- ・拙著『玄奘』清水書院，1994年。
- ・拙論「日持一宣化出土遺品とその科学的年代測定に関連して一」；『東方』第5号，6—22頁。1989年。